

P-221 悪性腫瘍化学療法におけるG-CSFの
投与効果の解析

山形県立河北病院

大野 勉, 高橋俊文, 田中栄一, 小田隆晴

【目的】悪性腫瘍化学療法においてG-CSFは不可欠になっているが、至適投与法は結論が得られていない。また、その好中球増加効果は、投与直後に骨髓から好中球が遊離される一峰目と、幹細胞から分化し放出される二峰目とに分かれている。今回G-CSFの連日投与と隔日投与を二峰性増加の面から比較し、同時にG-CSFの血中濃度を測定して、効果発現の差について検討した。【方法】婦人科悪性腫瘍患者18名にCAP療法（68コース）を施行した。G-CSF投与法は次の3群に分け、A群はG-CSF100 μ g連日14回投与、B群はG-CSF100 μ g隔日7回投与、C群はG-CSF200 μ gを隔日7回投与した。この間、好中球数を測定し、G-CSF投与初日と14日目の投与前から48時間後までG-CSF血中濃度を測定した。【成績】好中球の変化は、A群では投与開始から3-4日目と15日目の前後の二峰性増加が認められたが、B・C群では一峰目の日数が短く、二峰目の最高値も低い傾向にあった。第3コース目以降の一二峰間の最低値はA群2115 $\pm$ 166、B群1150 $\pm$ 218、1935 $\pm$ 408でB群が有意に低かった（ $p<0.05$ ）。第2コース以降1000以下の日数は、A・C群は0日だが、B群のみ1.7 $\pm$ 0.9日と有意に長かった。G-CSF血中濃度は、投与前では全例 <30 pg/mlで、投与後速やかに上昇し、6時間値は343 $\sim$ 11000pg/mlとバラツキがあり、3群の有意差は認められなかった。

【結論】G-CSF隔日投与では、骨髓幹細胞からの分化に対して作用が弱いことが示唆された。また、G-CSF血中濃度は個人差が大きく、化学療法後の微小循環の差が推測されたが、好中球増加との関係もなかった。

P-222 化学療法後の骨髓抑制に対する自己末梢血幹細胞移植の効果

福島県立医大

渡辺文則、大石麻里、矢沢美穂子、本多つよし、鈴木りか、柳田 薫、遠藤 力、星 和彦、佐藤 章

【目的】化学療法後の骨髓抑制回復期やG-CSF使用中に末梢血中に多数出現する血液幹細胞を採取し、化学療法後に血液幹細胞を移植する自己末梢血幹細胞移植を卵巣癌患者に施行し、化学療法後の骨髓抑制に対する効果およびその併用によるDose Upの可能性を検討した。

【方法】通常量の化学療法を行った後、その骨髓抑制回復期に連続血球分離装置を用いて2回の細胞分離採取を施行し、末梢血単核細胞を採取、凍結保存する。その後の化学療法はDose Upして行い、化学療法後、凍結保存しておいた末梢血単核細胞を移植する。症例は4例で、それぞれEAP療法又はCAP療法を通常量で行い、その回復期に末梢血幹細胞を採取した。その後の化学療法は1.5倍から2倍にDose Upし、化学療法後に自己末梢血幹細胞移植を行った。

【成績】通常量の2倍にDose Upした症例では白血球数の最低値が700/ μ l、白血球数2000/ μ l以下の日数が2日、血小板数の最低値は4.8万/ μ l、血小板数5万/ μ l以下の日数は2日と、良好な結果が得られた。また、血小板数は、最低値からの立上りが急激であり、自己末梢血幹細胞移植の効果があったと考えられた。

【結論】自己末梢血幹細胞移植併用により1.5倍から2倍までのDose Upが可能であることがわかった。また、血小板数の回復の立上りは急激であり、化学療法後の骨髓抑制に対して自己末梢血幹細胞移植の効果があったと考えられた。